

眞に近い手ぬかりの少い地理的關係を説明認識する事が出来ると思つてゐるが、今回は單に其のプロセスとしてドットマップを紹介するに止めて他日を待ちたい。

尙は人口分布の地理的考察に必要とする本縣の各種分布圖は其の一部の略化したものを第九輯の地理教材研究に載せて居るから御批評を蒙り度い。

別 府 間 歇 泉

その詳細な研究はいづれ適當な學者によつて試みられるであらうが、まだあまり世間に知れて居ない様であるから、私は單に一瞥した時の模様を略報するに止めて置く。

場所は別府公園の西、八幡地獄のすぐ下にあつて板地八幡と云つて居る。附近には數多の噴氣孔があつて、例の花製造も盛んである。そこへ溫泉を得るつもりで鑿井をやつたら、思ひがけなくも間歇噴泉が出来たのである。

それは大正十四年の八月九日であつた。急に百數十尺の高さに熱湯を噴出した。そしてその

西 龜 正 夫

後約五六分毎に一回の噴出を繰り返して今日に及んで居る。尤も十五年の五六月頃梅雨の降り續くころには一時間一回位となり、八九月頃から又頻繁になつた。頻繁な時は二三十尺にしか噴き上らないが、回数が減じると百尺近くに噴き上げるのを常とする。

最初は井の深さも三四十間に過ぎなかつたが、噴出の勢が減じてはどの懸念から、次第に掘り下げて今は五十五間一尺になつて居る、私が見たのは昨年の十月であつたが、やはり五分乃至八分毎に噴出し、一日の回数二百五十回、

高さは三十尺乃至四十尺、噴出時間は一回十秒乃至十五秒位であつた。尤も間歇の稍長いことが一日五六回あつて、二三十分間も間があると、次の噴出は七八十尺にも及ぶのであつた。その



間歇地獄噴出高五百尺餘

状は恰も嘗て熱海の間歇泉にあつた長湧の現象に似て興味深いものである。

大正十四年十二月中旬に、井内各部の温度を觀測した結果を聞くに左表の通りであつた。

地上よりの 深さ(間)	温度(攝氏)
1.	100
8.	103.1
13.5	121.3
19.	129.7
24.5	130.9
30.	128.8
35.5	116.0
41.	134.8
42.5	141.3

當時は井の深さ四十七間であつた。そしてこれは噴出前數分の時の温度で、噴出の直前には井底の温度が凡百五十度位になるらしいとの事である。

この表を見て面白いのは中間に温度の低い部分のあることで、この部に冷水が湧出して居るらしい。そしてその冷水は必ずや地表水に關係あるものであらう。梅雨の頃に回數の少くなるのも、秋から冬の少雨期に最も回數の多いのもそのためであると解せられる。

噴出の際は始めに熱湯を噴き上げ、次でその勢が階段的に衰へて行つて、最後は水蒸氣のみを噴き上げる様になる。噴出しない時にも水蒸氣のみは噴いて居る。噴出の直後に井の湯を汲

み上げさせて溫度を測つたら、九十五度であつた。

この寫眞は一昨年夏の夏に撮つたものである。

井のある處は少し深い穴になつて居るので、噴口の模様が见えないが、直徑四五寸の鐵管が植えてあるだけである。その附近には多少湯氣を噴いて居る處があつて、岩石は悉く風化して白

又は黃色になつて居る。今はこの人の立つて居る處に家を建て、見物に便し、穴の周圍には垣を作つてある。

雨量と噴出回數の變化との關係や、長湧の様な現象が何故起るかの問題など、研究すべき事項は多いが、それは今私の任でない。

大正十五年五月二十四日の十勝岳爆發記事

大正十五年五月二十四日突如として起つた十

勝岳の爆發は盤梯山、櫻島等の活動と共に我國明治、大正時代に於ける著しい火山現象の一つあつて、特殊の狀況の下に特徴をもつた事變を展開した火山學上注意すべき出來事である。

爆發直後實地踏査を行つた諸家の研究が種々の機關を通じて續々發表された。今左に掲げるものゝ中から諸家の見聞や所説を摘録する。

田中館秀三 十勝岳爆發概報(大雪山調査會)

渡邊萬次郎 十勝岳爆發調查報文 (Sci. Rep. Tohoku

Imp. Univ., Ser. II, vol. III, No. 1, 1926)

中村左衛門太郎 十勝岳泥流の速さ(地球、第六卷第二號)

田代 修一 十勝岳爆發の今昔(地學雜誌、第三十八年第四百五十一號)

渡瀬正三郎 十勝岳爆發と水害の原因(同右)

佐藤 文止 十勝岳爆發概要(同右)

田中館秀三 十勝岳硫黃山の噴火原因と現狀(同右)

福富 忠男 十勝岳爆發と之に伴つた出水に就て(日本鐵

業會誌、第四十二卷第四百九十四號)